

空海ゆかりの古道

かも道の魅力に触れる旅

弘法大師・空海ゆかりの道として
無数の人々が踏みしめてきた遍路道。
なかでも、第21番札所「太龍寺」へ通じる
「かも道」は、最も古い遍路道として
知られています。

手付かずの自然が残る古道には、
数々の歴史的・文化的遺産が現存し、
太龍寺山系で採掘された大理石は、
国家的近代建築物に使用されていました。
国史跡の追加指定、さらには
世界遺産登録に向けた動きが高まるなか、
こうした遺産をどう守り、
未来へ受け継いでいけばいいのか。
「かも道」の魅力に触れながら
考えてみたいと思います。

【題字・西敏晴さん（加茂町）】



四国最古の遍路道

太龍寺山のふもと、加茂町の一宿寺から太龍寺仁王門に至る約4・4キロの古道を「かも道」といいます。その呼称は、本道と若杉集落から太龍寺へ向かう太龍寺道（遍路道）との交差点に立つ道しるべの刻銘

や、太龍寺所蔵の絵図等に残された記述からそう呼ばれています。寛永18年（1641年）頃の阿波国大絵図には、加茂村から太龍寺まで尾根伝いに延びる道筋として赤道で描かれています。また、四国遍路の元祖といわれている江戸時代の僧侶、宥弁真念の「四国遍路道指南（1687年）」には、「これより太



「かも」と刻銘された標石

龍寺まで一里半、道ハちかミチなり。大師御行脚のすぢハ加茂村、其ほど二里、旧跡も有。」とあり、加茂村から太龍寺へ通じる「かも道」が参道であったことがわかります。その道沿いには南北朝時代（1336～1392年）に立てられた丁（町）石と呼ばれる標石があり、四国遍路が定着する以前からの古道であることを裏付けています。こうした丁（町）石が遺存しているのは、1400キに及ぶ四国遍路道のうち「鶴林寺道」と「かも道」の2カ所だけで、最も古い遍路道といえるでしょう。

かも道を歩く

「かも道」は、急峻な坂道とまだらかな道が交互に続く山道。かつて、空海が太龍寺に修行に訪れた際に通ったとされ、多くのお遍路さんが大師の足跡をたどりました。手付かずの自然が残る古道には原生林が生い茂り、四季折々で表情を変えます。自然の営みを肌で感じながら散



寛永18年頃の阿波国大絵図（徳島大学附属図書館所蔵）



標石の説明を受ける参加者の皆さん

策できるのも魅力の一つといえます。そんな魅力を実際に体感してもらうイベント「みんなで歩く！太龍寺道・かも道」が、3月24日に開催されました。参加者は、加茂谷中学校から太龍寺までの往復約10キロを、県や市の職員から説明を受けながら山行しました。「かも道」を歩いていると、実にさまざまな史跡に出会います。一宿寺から太龍寺仁王門までの距離を示した丁（町）石、西国三十三観音菩薩像を祭った石室、遍路途中で病氣や行き倒れで亡くなった人を祭った遍路墓や弘法大師坐像などの石造物が点在し、道の歴史をたどることができます。平成22年度に阿南市が行った測量調査では、丁（町）石19基（内11基が県指定史跡、7基が市指定史跡）、石室22基が確認されています。なか



七丁前の遍路道



竹林内の丁石

私たちが普段、何も気を留めず利用している道には、長い年月の中で人々が刻んだ歴史・文化が存在します。その中で最たるものが「遍路道」ではないでしょうか。遍路道の中には、人々の暮らしや信仰が垣間見えます。阿南市内の遍路道にはそれが色濃く残り、特に「かも道」は、歴史的文化的に価値の高い石造物が多く残る古道となっています。

その石造物の中に「丁石（室町時代は『町石』と表示）」といわれる標石があります。丁石とは、1丁（約109m）おきに立て、道のりを数字で示した石です。（※かも道丁石はカウントダウン方式で数字が刻まれています。）丁石にもさまざまな様式のものがありますが、かも道丁石は高さ1m前後の尖頭方柱形式（五輪卒塔婆が簡略化されたもの）と考えられています。で、南北朝時代（京都の北朝と吉野の南朝とが対立していた時代）に造られたものです。かも道丁石には「貞治」とい

う元号が刻まれています。「貞治」とは北朝側の年号で、当時、この地域は北朝側の影響下にあったことがわかります。ただ、南北朝時代に刻まれた文字は、風化により読み取りづらくなつたため、江戸時代以降に新たに文字が深く刻み直されています。これらの丁石は、真言密教に対する庶民信仰の高まりを裏付ける資料として大変貴重なもので、文化財指定を受けていますが、現在も現役で道しるべとしての役目を担っています。

また、歴史的なもの以外でも古道としての景観を色濃く残っています。竹林の中を進む通称「青の道」、石灰岩の露出した「白の道」、そして秋には紅葉の落ち葉で真っ赤に染まる「赤の道」。それだけではなく手付かずの自然の中を歩けば、平安時代（弘法大師空海の時代）にタイムスリップしたかのようです。空海もこの道を踏みしめ、この風景を眺めていたと思うと心が洗われます。



「白の道」

「青の道」

「赤の道」

まさに信仰の道です。歴史（丁石）と自然が見事に融合した「かも道」をぜひ歩いていただき、阿南市にしかないすばらしい魅力を感じていただきたいと思います。

かも道の魅力を語る人たち

No.1
阿南市

歴史と自然が見事に融合した信仰の道



プロフィール
向井 公紀 さん
(MUKAI Kiminori, 1981年生)
市文化振興課 主事(埋蔵文化財専門)

- 《阿南市での発掘調査》
H18 森甚五兵衛屋敷跡(椿泊)
H19 牛岐城跡(富岡町)
H21 川原遺跡(宝田町)
H23 一宿寺経塚跡(加茂町)
内原成松窯跡(内原町)
- 《遍路道の調査》
H21～ かも道 ほか

でも、丁（町）石はその石材から特に貴重とされ、徳島大学大学院の石田啓祐教授の調査では、現在の神戸市東灘区御影町の北に位置する六甲山地で産出された本家本元の「御影石」が使われていることがわかりました。風雨に強い良質の御影石は、数百年にわたりお遍路さんの道しるべになつてきたのです。

一宿寺から1.5キロほど登った所に弘法大師坐像が据えられています。その側面には「文化乙丑（1805年）十一月廿一日 小延村 智海」とあり、寛永通宝（江戸時代のお金）が置かれています。江戸時代の人々も大師の足跡を追体験していたのでしょうか。そんな歴史ロマンに思いを馳せながら、一路、太龍寺をめざします。

途中、一行は石灰岩の採掘場跡で腰を下ろしました。岩山に立つと、そこからは、幾重にも重なる稜線の東方に、青く輝く紀伊水道が見えました。夜には満天の星空が頭上に降りそそぐ見晴らしのいい場所です。これこそが若き日の空海が見たのと同じ景色。空海は、太龍寺や室戸岬で修行を積んだ後、22歳の時に幼名「真魚」を「空海」と改名しています。一説に、空海の「空」という字は太龍寺での修行の際に思いついたとされ、この雄大な景色と名前の由来が重なります。「空」と「海」、何て大きな名前なのでしょう。



石灰岩採掘場跡からの眺望



寛永通宝が置かれた弘法大師坐像

旅路に興を添える「地域伝説」

若き日の空海が山河を巡って修行を積んだ四国遍路の道々には、今も色あせない大師ゆかりのさまざまな伝説が語り継がれています。「加茂谷村史」には、杖をひと突きして鶴林寺まで飛んでいった伝説が、また、「阿州奇事雑話」には、土地の人々の作物を荒らす竜を法力で窟（石灰岩の鍾乳洞）に閉じ込めた「竜の窟伝説」が記されています。崩れ落ちてきた岩を拳一つで受け止めたという伝説は、地元で語り継がれてきました。いずれも空海にまつわる話ですが、現実離れしていて逆に興味を掻き立てられます。「加茂谷村史」には、太龍寺山山頂に向かって岩が少しづつ動いて、山頂に到達すると地球が泥海に沈んでしまうという「にじり石伝説」も残されています。こうした逸話の起源は定かではありませんが、地域伝説が古道の旅に興を添えてくれます。



- ①空海が岩を拳で受け止めたとされるくぼみに手を当てる片山 要さん(吉井町)。
②伝説の「にじり石」。実際に見てみると、にじりながら動いているようにも見えます。

かも道の魅力を語る

今回のウォーキングに併せてフォーラムも開催されました。パネラーの皆さんは、「かも道」の魅力を次のように語ります。ウォーキングに参加した青木さんや地元横井さんにも話をうかがいました。

かも道の魅力を語る人たち

No. 3
羽ノ浦町



プロフィール

青木 中 さん
(82歳・羽ノ浦町)

平成24年発行の阿南市史民族編「農村の暮らし」執筆。趣味の日本画で内原町東福寺の天井絵奉納。

かも道の魅力を語る人たち

No. 2
徳島大学

大理石採掘場跡は学術・文化・歴史を物語るかけがえのない遺産

(写真=石田教授提供)



東京国立博物館本館正面の帝冠様式大階段と壁面に使用された「時鳥」



国会議事堂御休所広間の「時鳥」一枚岩と幅木の「淡雪」(阿南市阿瀬比町・加茂町黒河産)

阿南市がかつて全国有数の大理石の産地であったことは、皆さんご存じですか。中でも代表的なのは、国会議事堂の内装に使用されていることでしょう。国会議事堂では年間35万人を超える参観者に「この大理石は徳島県阿南市から切り出されたものです」と説明されています。

国会議事堂は昭和11年に完成しており、別名「大理石の博物館」といわれるように、全国から集めた37銘柄に及ぶ大理石が使用されています。中でも徳島県産は数量が最も多く、阿南市と那賀町から産した7銘柄が要所に用いられています。議事堂の内部は毎日のように

テレビで放映されますが、中央玄関と議員控室入口には桑野町大地産の「加茂更紗」が、中央階段から御休所広間には阿瀬比町垂利田産の「時鳥」、広間と議場廻りの幅木には加茂町黒河産の「淡雪」、中央広間のモザイクには宝田町井関産の「新淡雪」、3階廊下の幅木や傍聴席への階段には津乃峰町東分の「答島」といった具合に、背景に映る石材は大半が徳島県産と言ってもいいほどです。昨年は、国の重要文化財である上野の国立博物館本館の階段や壁面にも「時鳥」が使われていることが確かめられました。

切り出しの歴史をたどると、江戸時代の文化文政期から太龍寺の礎石や石段に大理石が使用された実績があり、昨年度の調査では、いわや道の尾根沿いに礎石の採掘跡が確認できました。明治後半の加茂谷全図には、西加茂尾根のかも道沿いに「大理石」の採掘場所が記されています。

- 1. 議事堂や博物館など近代遺産の主要な箇所にも多量に使用されている。
- 2. 採石跡が当時の状態で現存する。
- 3. 採掘当時の文書資料や写真、道具が残されている。
- 4. 採掘岩体は稀少で、特徴のあるものが使用されている。
- 5. 採掘跡からは、当時の採掘技法や搬出方法を知ることができる。

このように、太龍寺山系では江戸期から大理石の採掘がはじまり、大正と昭和初期には国家的近代建築の内装材として大量に搬出されました。その採掘跡は、使用された石材とともに学術・文化・歴史を物語るかけがえのない遺産であり、遍路道とともに将来にわたって保存活用すべき価値あるものといえます。



プロフィール

石田 啓祐 さん
(ISHIDA Keisuke, 1953年生)
徳島大学大学院教授(理学博士)

太龍寺山系の地質を調査。国際研究の傍ら、国会議事堂をはじめとする徳島産大理石とその生い立ちを紹介。

遺跡が語るかも道

一宿寺から「かも道」に入ると、切通しの側壁に椎の巨木が屹立し、露出した板状の根張りに強い生命力を感じ、元気を得て進むと、西国三十三観音写し霊場の石室がありました。原形をとどめる4基の遺構の1つで、ご本尊の石佛は一宿寺の境内に移されています。さらに進むと右側に背丈ほどの石垣があり、往時は、石材を運び出した木馬道であったが、雑草に覆われ軌跡を見ることができません。

竹林や針葉樹林を経て、雑木林のはざまを抜けると大理石の採掘場跡に出ます。しばらく急な坂道を登ると、参道に沿って太龍寺へ移動中という伝承の大岩「にじり石」を追い越し、緑の林を過ぎると、二十三丁石の辺りから杉の木立となります。木漏れ日の差す林間を尾根伝いに進むと、山肌が自然に盛り上がり、土手の上を歩くような気分させて

くれました。延長30ほどでありますが、西遊記に「左右皆谷にて足のふむところわずかに馬のせなな程なれば、馬の背と言ふなり」とあるような、「土橋」にも趣があるなど見どころも多く、急な登り坂の後には緩やかな箇所があり、足にやさしく歩いて楽しい、心癒される遍路道です。

(注)

切通し 山などを切り開いて道路または水路にしたところ。
観音写し霊場 西国三十三観音霊場をコンパクトにして、誰でも気軽にまわれるように、地域に敷設された巡礼札所のこと。

遍路道の今、昔

かも道の魅力を語る人たち

No. 4
水井町



プロフィール

横井 知昭 さん
(67歳・水井町)

大阪の大手量販店を退職し、10年ほど前に帰郷。現在は農業に従事。

昭和30年頃まで、毎年、旧1月12日に太龍寺の市が立っていました。太龍寺は、いずれの参道も急峻な山道で、ふもとの集落から2時間以上かかる難所の札所寺です。露店も数店で参拝者も少なく、同じ日に開かれる末寺の加茂・一宿寺の市が大そうにぎわっていました。市の立つ日、加茂周辺の住民で元気な人は、一宿寺を参拝してから「かも道」を登り、太龍寺参りをするのが一般的でした。

加茂には、太龍寺所有の田が多くあり、一宿寺の直下に太龍寺の米蔵がありました。専属の担ぎ屋さんが数名いて、60kgのお米を背負って(昔の人は力が強かった)にじり石を経由し太龍寺にお米を運んでいました。一方、通常の参拝や小学校の遠足には、「竜の窟」を経由する「いわや道」を利用していました。

私がUターンした10年前、子どもの頃の記憶をたどりながら「かも

道」を登りましたが、道崩れや倒木が多数あり、シダなどに覆われた箇所ではやぶこぎを余儀なくされた経験があります。先般、市が整備して、一般の方も山歩きを楽しめる歩きやすいコースになっています。

お四国参りの歩き遍路さんは、水井橋で那賀川を渡り(私の子どもの頃は渡し舟)、若杉谷沿いを登り、太龍寺を参拝。次の平等寺へは、中腹の駐車場から林道を下るのが順路になっています。このうち、下りのルートは、もともと遍路道ではないので、丁石などの石造物もなく、つづら折りの味気ない道のりです。通行不能の「旧竜の窟」付近に迂回路を設け、南舎心を経由する国の史跡指定「いわや道」が復活整備されれば、お遍路さんや参拝者、山歩きファンにとって、より趣のある遍路道になると思います。

丁石の落葉に埋る古道かな

地域の連携で 守りつなげる 遍路道遺産

(写真=徳島県教育委員会提供)



二十六丁石前の遍路道



仁王門前の三丁石



相隣業と大理石の基壇
(太龍寺境内)

四国遍路を 世界遺産に！

今、四国では「四国遍路を世界遺産に」という大きな目標に向けた動きが活発化しています。きっかけは、世界文化遺産候補の選定方法が国のリストアップ方式から地方の公募型提案方式に改められたことです。2006年(平成18年)11月30日、4県共同で「四国八十八箇所霊場と遍路道(案)」として世界遺産暫定一覧表記載資産候補に名乗りを上げました。ところが答えはノー。最大の理由は、「遍路そのものは素晴らしい文化だが、世界遺産として推薦するためには、札所や遍路道を文化財保護法が定める文化財に指定しなければいけない」ということでした。国から示された課題を解決するため、2010年(平成22年)3月16日に、四国4県の産官学、ボランティア団体による「世界遺産登録推進協議会」が設立され、官民あげてさまざまな取組を展開しています。徳島県では、「歴史の道調査」および「歴史の道整備活用総合計画」に基づき国の史跡指定等保護措置に取り組んできました。そのモデル事業として、平成21年度から鶴林寺と太龍寺を結ぶ遍路道の詳細な調査を行い、2010年(平成22年)1月26日に国史跡指定についての意見具申を行いました。その結果、「弘法大師ゆかりの回遊式の巡礼道で江戸

平成22年8月5日、「阿波遍路道 鶴林寺道・太龍寺道・いわや道」として、第20番札所鶴林寺から第21番札所太龍寺をつなぐ区間約4.5km(内、阿南市約2.4km)が国史跡として指定されました。遍路道の国史跡指定は四国初で、阿南市においても第1号の国指定史跡となりました。四国八十八箇所霊場を巡る遍路道は、空海ゆかりの社寺を巡る1400mに及ぶ壮大な霊場巡礼道であり、また古来より民衆に支えられ受け継がれてきた文化交流の舞台でもあります。そして、遍路道が結ぶ札所寺院の中でも、大自然の中に荘厳なたたずまいを誇る太龍寺は、若き日の空海修行の場として特筆される寺院であり、本堂・大師堂をはじめ多くの建造物が今に伝えられています。

誇れる文化遺産を 未来に受け継ぐ 仕組みづくりを考える

時代以降、今も民間に広く普及する信仰文化を伝える史跡である」と評価され、国史跡に指定されたのです。平成22年度には、「いわや道」「平等寺道」「かも道」の調査も実施済みで、さらなる追加指定をめざしています。

「かも道」の旅を振り返り、遍路文化の一端や、そこから発展してきた地域固有の歴史を垣間見ることができました。その一方で、路肩や石室の崩壊などが散見され、史跡を含めた道全体の保護の必要性も強く感じました。「かも道」は、人が通らなくなった旧遍路道ですが、歴史に培われたその地域にしかない特色を色濃く残す貴重な財産であり、これらをどのように保護し、活用していくべきかが今後の課題といえます。そんななか、11月23日に専門家を交えたフォーラムが開催されることになりました。来年10月には、歴史



上) 原形をとどめている石室
下) 崩壊した石室



プロフィール

早淵 隆人 さん
(HAYABUCHI Takahito, 1959年生)
徳島県教育委員会
教育文化政策課 社会教育主事
(日本考古学協会員)

1989年から財徳島県埋蔵文化財センター勤務。小学校教諭を経て2008年から現職。世界遺産登録に関する資産の保護業務を担当。

国史跡として指定された区間の遍路道は、太龍寺はもとより、地元住民により数百年にわたり守り受け継がれてきた古道で、遍路道標・丁石など遍路文化を色濃く残した古の景観が高い評価を受けました。また、阿南市が追加指定をめざしている内の加茂町の一宿寺から太龍寺への遍路道約4.4kmは、ルートが確定できる県内最古の古道で、南北朝(1336~1392年)の町石のほか、室町時代の板碑など遍路道成立の歴史を物語る文化財も多く残されています。また、遠くに紀伊水道を望む雄大な自然景観のほか大理石の採掘跡も残り、文化財と自然、そして地域の人々の営みが一体となった景観は、他の遍路道では類を見ないもので、国史跡としてふさわしいルートといえます。国史跡指定を受けた遍路道は、国により守られることとなりますが、直接管理するのは管理団体である阿



シルバー人材センター会員による環境整備の様子

の道の保存や活用について全国規模で考える「第12回全国歴史の道会議(徳島大会)」が阿南市で開催される予定です。こうした機会を通じて、ふるさと阿南の誇るべき優れた歴史文化を全国に発信し、古道を未来に受け継ぐ仕組みづくりを市民の皆さんとともに考えていきたいと思えます。空海は、阿波(徳島県)を「発心の道場」と定め巡礼した際に、こんな言葉を残しています。「物の興廃は必ず人による」1200年の時を超え、今なお私たちの「心の道しるべ」として語りかけています。

《参考文献・資料》
阿波遍路道「いわや道・かも道」調査報告書
徳島県歴史の道調査報告書 第五集 遍路道
阿南市史 第二巻
加茂谷村史
弘法大師空海のことば(みすずき出版)
阿波の遍路文化(財徳島地方自治研究所)
世界文化遺産特別委員会における調査・結果
史跡等の指定等について(文化庁)

平成24年度徳島県のいにしえ再発見 史跡・埋蔵文化財総合活用事業

阿波遍路道 ~太龍寺道・いわや道・かも道~ フォーラム

主催/徳島県教育委員会 共催/阿南市

11/23
(祝)

9:30~12:00
文化会館1階 視聴覚室
入場無料



◆講演

- 『国史跡阿波遍路道の魅力』 阿南市文化振興課 主事 向井公紀さん
- 『阿波大理石について~その歴史と魅力~』 徳島大学大学院 教授 石田啓祐さん
- 『国史跡阿波遍路道の保護と活用』 徳島県教育委員会 教育文化政策課 社会教育主事 早淵隆人さん

◆意見交換会 テーマ『遍路道を守り、未来につなぐ』

◆問い合わせは 文化振興課 ☎22-1798へ